

『パレスチナを生きる』

2020年2月27日

私はパレスチナ人が置かれている状況に関心を寄せている。イスラエル旅行に行った時、ベツレヘムのルター派のパレスチナ人教会を訪ねる機会を得た。ミトリ・ラヘブ牧師に会い、短い時間であったが、話を聞くことができた。イエス時代から、2千年来、ここに住むクリスチャンであると誇らしげに話していた。師は来日し、新宿のルーテル教会で講演をされた。私は聞きに行き、師の著書『私はパレスチナ人クリスチャン』に「キリストにおける連帯の徴として」との、サインを頂いた。

ユダヤ人はヒトラーによって、600万人もの人が殺害された悲劇を体験した。第二次大戦後、国際政治は、イスラエルの建国を認め、1948年に国家再建を宣言した。建国したイスラエルは、住んでいたパレスチナ人を圧迫、差別し、ヨルダン川西岸地区とガザ地区の自治区に押し込んだ。パレスチナ人はヨーロッパでユダヤ人が受けたと同じような迫害に苦しんでいる。地中海に面したガザ地区は、東京23区の約6割に当たる土地に約200万人が住んでいる。イスラエルは境界封鎖を強化し、人や物資の移動を厳しく制限し「天井のない監獄」と評されている。失業率は53%に達し、若者の失業率は7割を超え、女性は8割近くに達する。

朝日新聞元エルサレム支局長の渡辺丘氏が『パレスチナを生きる』（朝日新聞出版）を上梓し、閉ざされた壁の中で暮らすパレスチナ人の「いま」を、個々人の名を上げて、その生活を具体的に描いている。パレスチナとイスラエルが和解しない限り、中東は安定しないと聞く。私はパレスチナ人のために何かをしている訳ではないが、彼らの日常を知り、その情報を交換し合うことに意味があると聞き、紹介したいと思う。

米国のトランプ政権は、国際的な約束を無視し、2017年12月に、エルサレムを首都と宣言し、在イスラエル大使館をエルサレムに移すと決めた。また、3割を占めていた国際パレスチナ難民救済事業機関への拠出金を止めると発表した。これらを契機に、「帰還の行進」と名付けられた抗議デモが始まった。イスラエル兵が待ち構える境界フェンスに向かって、「革命」というタイトルの歌を歌いながら、奪い取られた故郷への帰還を訴える人々、5歳くらいの幼児も加わる非暴力デモである。イスラエル兵に向けて石を投げつける若者もいる。すると、イスラエル兵は銃撃し、死傷者が続出する。21歳のラザン・ナジャルさんは看護師で、フェンスから百メートル離れた所で倒れていた負傷者を助けようとしていた時、胸を撃たれて死亡した。母親は「娘の唯一の武器は白衣だ。人の命を救っていた娘を撃つなんて許せない」と怒り、娘に代わり、医療スタッフのボランティア活動をしている。殉教は名誉だという評価もある。希望を失い、イスラム教が厳禁する自死する若者もいる。出口のない、希望のない、想像しただけでも息詰まるような生活状態である。

しかし、ごく少数ではあるが、ガザの「監獄」から抜け出て、世界に羽ばたこうとする人々がいる。日本に来て「違う惑星に来た」という少女は、日本の医療に触れ、医者になりたいという希望を持った。起業した人、歌や曲芸などで、自由を求める逞しい人々もいる。彼らを通して閉鎖されたガザに風穴を開けることを期待する。

渡辺氏は「死者〇〇人、負傷者〇〇人」という表現ではなく、個々人の生と死を生々しく描き、胸を突かれる。また、パレスチナと関わる日本人の活躍も報告している。パレスチナ問題は、極めて国際政治的な問題である。殊に、トランプ大統領になってから、パレスチナ人は窮地に追い込まれている。現在、中東問題は混迷を深め、パレスチナ人は忘れ去られようとしているが、彼らへの思いを留めることに意味があるだろう。